

平成29年度「海の学びミュージアムサポート」事業完了報告書

事業内容：

平成27年度から新たに開始した「海の学び ミュージアムサポート」事業の3年目として、全国の博物館を対象に様々な地域、いろいろなジャンルをテーマにした博物館活動から、「海洋」に関する生涯学習の場を広げ、国民の理解増進を図る事を目的に実施した。

プログラム1「海の企画展サポート」として、全国16か所の博物館等が開催する16の海の学びに関わる企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示や付帯事業を通して「海洋」に関する国民の理解増進を図った。その他、プログラム2「海の博物館活動サポート」として12の博物館等が行う12の参加型プログラムを支援するとともに、プログラム3「海の学び調査・研究サポート」として5つの博物館等が行う5つの調査研究事業を支援し、海の学びを生み出す博物館活動の実施に向けた支援を行った。また、本年度より新たに「情報・ノウハウのサポート」として、海の学びの実施に係る協力依頼のあった博物館や、海の学びの実践や拡充において、他施設との連携の必要性を有する地域に対して、施設間の情報交換の場を設定するなどの情報・ノウハウのサポートを行った。

あわせて、本事業の趣旨や目的、募集情報やサポート事例を広く博物館や一般に広報することを目的にWEBページの公開・運用を行った。あわせて平成30年度サポート事業の公募を行うことにより、本事業への申請や相談を広く受け付け、全国の博物館等に対して本事業の存在やねらいの周知を行った。また、さらなる事業のPRとして、「サイエンスアゴラ 2017」(主催:独立行政法人科学技術振興機構)にブースを出展し、事業成果の紹介とともに事業PRを行った。

なお、第三者評価導入の観点から、プログラム1・プログラム2において各博物館等が開催した事業への来場者・参加者を対象に、各サポート対象事業における「海の学び」の成果を把握することを目的とした『来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)』を実施すると共に、各サポート館自体が海の学び活動を通じてどの程度「海の学び」の必要性や理解を得られたのかの情報収集を目的とした「実施者アンケート」を実施した。

1. プログラム1「海の企画展サポート」への支援(申請:29団体31事業、支援実施:16団体16事業)

- ①名 称 :常設展示リニューアル記念特別展「冷たい海の大冒険!!!～関勝則が写す北の海の生き物～」
- 主 催 者 :釧路市立博物館
- 開催時期 :平成29年9月2日～平成30年6月10日
- 場 所 :釧路市立博物館
- 内 容 :本特別展では観察会、講演会をはじめとした付帯事業の実施により、一般市民や観光客に対して広く釧路の海の魅力を伝え、また子供たちの地域の海についての興味関心を喚起し、海の学び深めると共に、地域の自然と文化などに対する郷土愛の醸成を促すことを目標に実施した。観光客や釧路地方にすむ一般市民や子供たちに地域の海にすむ生き物の生態や海洋環境、地域の食文化、経済とのつながりなどを広く深く学ぶ機会を提供し、釧路の海の魅力

を広く発信することを目的として企画展および付帯事業を実施した。

- ②名 称 : 企画展「もし海がなかったら～海の役割と極域の生物から海の環境を探ろう～」
主 催 者 : 蘭越町(蘭越町貝の館)
開催時期 : 平成29年6月3日～10月31日
場 所 : 蘭越町貝の館
内 容 : 本企画展では、「もし海がなかったら」をテーマに、海の役割について広く知ってもらう機会として開催しました。現在、地球は、人為起源の二酸化炭素による温暖化が進行しており、近未来の予測では、温暖化によって多くの生物が様々な影響を受けます。温暖化現象については、広く知られていますが、海洋生物に大きな影響を与えるもう1つの現象として、海洋酸性化があります。この機構は、二酸化炭素が海洋に溶けることによって、加速します。海の酸性化はあまり浸透していない現象ですが、冷たい水ほど多くのガスを吸収する性質があるので、冷たい海、すなわち極域から進行します。しかしながら、日常において、これらについて学習の機会が少ないのが現状で、博物施設が積極的に情報発信していないのも現状と言えます。そこで、当館は、貝類を専門とした博物施設であることから、施設のコンセプトを通じて、これらの課題について情報発信することを目的としました。
- ③名 称 : 特別展「柳原良平の海・船・港」
主 催 者 : 苫小牧市(苫小牧市美術博物館)
開催時期 : 平成29年9月9日～11月12日
場 所 : 苫小牧市美術博物館
内 容 : 「アンクルトリス」を生み出し、多彩な仕事で知られる柳原良平(1931-2015)の創造の根底には常に船への憧れや情熱があった。本事業では、柳原の船への関心がどのように展開し、作品として表現されてきたかについて紹介した。また、苫小牧港からの航路を有する株式会社商船三井や苫小牧港開発株式会社などからの協力を得て、海上で活躍する様々な船の役割と歴史を紹介する展示や付帯事業を実施することにより、わが町の海への親しみを醸成することをめざし、総合博物館としての特質を活かした美術展にとどまらない多角的な視点での海の学びを提供した。
- ④名 称 : 平成29年度企画展「鰯は弱い役に立つ～肥料の王様 干鰯～」
主 催 者 : 千葉県立関宿城博物館
開催時期 : 平成29年10月3日～12月3日
場 所 : 千葉県立関宿城博物館
内 容 : 江戸時代中期以降の庶民の暮らしを支えた木綿や麻、藍、菜種、煙草など商品作物の栽培を可能にしたのは、当時画期的な効果を示した肥料「干鰯」「鰯粕」の大量生産と流通であった。鰯を乾燥させた干鰯やゆでて絞め固めた鰯粕は、九十九里など房総各地の海岸が全国最大の生産地であった。大量に

製造された干鰯やメ粕は、船で海や川を伝って各地の農村に運ばれ、そうして栽培した作物がまた船で全国に流通した。本企画展では、肥料としての鰯を取り上げ、近世以来の漁法や製造法、また利根川水運など船を利用した流通及び近世経済に及ぼした影響などについて紹介しながら、海からの資源である鰯が肥料として加工され、船によって各地に運ばれ、人々の生活を支えていたことを理解してもらうことにより、川や海の大切さも伝える機会とした。

- ⑤名 称 :企画展「江戸へ魚を送れ!-漁場としての横浜周辺の海-」
主 催 者 :公益財団法人帆船日本丸記念財団(横浜みなと博物館)
開催時期 :平成29年10月7日～11月26日
場 所 :横浜みなと博物館
内 容 :かつて横浜の漁業が、江戸時代の江戸前の食文化の形成に寄与してきたこと、また戦後以降、高度成長期のウオーターフロント開発の時代を経ながらも今も脈々と続き国際貿易港と漁業が共存していることについて紹介すること。以上 2 つのことを示して、海の環境の重要性、及び将来について考える機会としました。錦絵、海図、江戸時代の料理のサンプル、昭和 30 年代の漁業の写真など展示資料約 200 点を通じて、江戸時代の東京湾の豊かさ、横浜の漁業の歴史を紹介した。これら資料の展示によって、海が豊かであったればこそ、江戸前の食文化が形成されたことが、説明できました。同時に今日も食文化を継続するためには、東京湾の漁業の地産地消と、海の環境の浄化、維持が必要ということも学んでもらう機会とした。
- ⑥名 称 :企画展「北前船と日本海海運」
主 催 者 :石川県立歴史博物館
開催時期 :平成29年4月22日～5月28日
場 所 :石川県立歴史博物館
内 容 :海をとおした北前船の活動が、物流や雇用を活発なものとし、各地域の経済活動や地域間交流の基礎となっていた歴史を知ってもらい、その歴史は各地域における今日の生活文化の基礎の一つを形作っていること紹介することを目的とした。本企画展の展示を通して、海がもたらしてきた経済・生活・文化の基盤に触れ、海とのかかわりが今日の生活の基礎の一つにもなっていることに気付いてもらう契機とした。また、歴史の中で、海と深くかかわって来た暮らしや経済活動が各地域を支える基礎になっていたことを知ってもらい、これから海への関心や親しみをさらに高めていくことや、海とかかわり海を活かした将来の地域作りへ向けた活動への端緒となることを期待した。本企画展では、資料展示のほか、講演会や展示室での列品解説、関連地へのバスツアー、連携機関によるイベント開催、土日祝日限定で砂絵・ストラップ作りなど、多方向から海と生活との歴史に興味を持たせる仕掛けを提供した。
- ⑦名 称 :企画展「“釣”^{ちよう}水族館」
主 催 者 :東海大学海洋科学博物館
開催時期 :平成29年7月8日～10月29日

場 所 : 東海大学海洋科学博物館
場 内 容 : 「釣り」を多角的に展示し、対象魚種の生息場所である海という環境について深く理解し、さらにその素晴らしさを再発見する企画展として実施した。展示項目は「釣りの今むかし」、「現代の釣り道具」、「一釣り魚」、「静岡の釣り」、「私の釣り自慢」、「釣り情報」とし、釣りの歴史・科学技術・文化を学ぶ内容を展示した。「釣り」の面白さ、奥深さを学び、そこから身近な海へ出かけ、海と環境について考える時間を増やし、海洋環境の保全・保護に関心を持ってもらうことを目的とした。付帯事業で「釣り教室」、「サマースクール」、「講演会」、「ルアー作製」を企画実施した。釣りメーカーをはじめ、釣りの伝道師、道具を作製する技術者、海洋生物の専門家がそれぞれの経験を活かし、釣り文化の継承と海洋の環境学習、海洋保全に関連する教育活動を事業内容とした。

⑧名 称 : 特別展「骨まで愛して♥海の生きもの ～まるごと使う、まるごと学ぶ～」

主 催 者 : 公益財団法人東海水産科学協会(鳥羽市立海の博物館)

開催時期 : 第1会場…平成29年7月15日～10月16日

第2会場…平成29年7月15日～11月26日

場 所 : 鳥羽市立海の博物館

場 内 容 : 骨というと“不吉”“食べるときに邪魔”というイメージを持つ人も多いですが、海の生きものの骨には生態や環境などについて知るための多くの情報が詰まっており、食や信仰の面で日本人の暮らしと密接に関わってきたことを展示から学ぶことで、海への親しみを持てるように構成した。簡単な骨格標本の作り方や、骨まで使った調理方法、伝統的な魚骨のお守りやアート作品の作り方などを紹介し、触る・作る体験のできるコーナーも多く設けることで、以後の自主的な海の学びの実践を促した。魚の骨を使ったものづくりや、骨まで上手に使うおさかな料理教室、楽しみながら魚の身を残さず食べる体験を通じて、魚の骨の形状や役割など生態への興味を深めてもらうとともに、自然からの恵みに感謝し、無駄なく利用することの重要性を伝えることを目的として開催した。

⑨名 称 : イセエビ漁のにぎわい～海と人がつながる漁村の活気～

主 催 者 : 三重県総合博物館

開催時期 : 展示①「先っちょ志摩に生きる」

…平成29年9月30日～12月3日

展示②「くらしの道具と小学生と調べるイセエビをめぐる食文化」

…平成30年1月4日～2月16日

場 所 : 三重県総合博物館

場 内 容 : イセエビは日本各地で古くから祭礼や正月飾り、高級食材として利用されており、海の恵みの象徴であり、人と海との関わりを深く掘り下げて学ぶことのできる海産物である。そこで志摩地域のイセエビ漁について、地理や歴史的背景、最新の研究成果を含め紹介する2つの展示を実施した。展示①「先っちょ志摩に生きる」では、志摩地域の中でも特に個性的な「先志摩」地域に焦点をあて、イセエビ漁や海女漁などをはじめとする地域の生業やくらしの移り変わりについて、背景となる自然環境を含め紹介した。展示②「くらしの道具と小学生と調

べるイセエビをめぐる食文化」では、小学校3・4年生が社会科で「昔の道具」の単元を学習する時期にあわせて、昭和の時代の暮らしについて理解を深める展示を行った。その中で、志摩地域のイセエビ漁をめぐるコミュニティの助け合いと、漁で得られた豊かな魚介類をみんなで分かち合う漁村のコミュニティの伝統やそこから生まれる食文化を受け継いできた知恵について、地元の小・中学生とともに調べ学習した成果を展示した。

- ⑩名 称 : 特別展「瀬戸内海の自然を楽しむ」
主 催 者 : 公益財団法人大阪市博物館協会(大阪市立自然史博物館)
開催時期 : 平成29年7月15日～10月15日
場 所 : 大阪市立自然史博物館
内 容 : 大阪市立自然史博物館では瀬戸内海沿岸の博物館・水族館等と連携し、2012年度から市民参加の観察会や調査会などを行い、多くの情報や標本資料を蓄積してきた。今回はこの成果をもとに、「瀬戸内海の地質学的・生物学的な魅力」「瀬戸内海の海域ごとの自然や、特徴的な生き物」「瀬戸内海の生物多様性からもたらされる、魚介類を中心とした自然の恵み」「瀬戸内海を科学的に調べる歴史と成果」「瀬戸内海が抱える問題と、その解決に向けての方向性」を紹介する特別展「瀬戸内海の自然を楽しむ」を開催した。また、講演会、ワークショップ、ギャラリートーク等の各付帯事業により、上記内容をさらに深く学ぶ機会を設けた。さらに、中高生向け及び小学生向け展示見学ワークシートを作成し、夏休みの課題や遠足見学で利用してもらうことにより、学校の授業の中で展示内容を活用してもらえるようにしました。
- ⑪名 称 : 秋季特別展「海に生きた人びとー漁撈・塩づくり・交流の考古学ー」
主 催 者 : 大阪府立弥生文化博物館
開催時期 : 平成29年10月7日～12月3日
場 所 : 大阪府立弥生文化博物館
内 容 : 海洋立国、日本のルーツを探るために海を舞台に活動した海民の文化を考古学的に紹介した。日本列島各地に発達した海の文化を旧石器時代から奈良時代まで、地域的・時代的に幅広くあつかい、海とのかかわりの強さを歴史的に示した。最新の海のトピックを考古学・古代史などの専門家の講演会を通じて知っていただき、海への関心をより高めてもらうための「海の学びセミナー」を企画した。今に通じる海の生態や環境の大切さを知るためにきしわだ自然資料館と連携して「チリモンを探せ！」を実施した。また、展示でも大きくあつかった製塩土器の使用方法を再現する土器製塩のワークショップを行い、古代の人がどのように海の恵みを得ていたのかを知っていただいた。古来から続く人と海との深いかかわりを知ることで、現在の海により親しみを持っていただき、海的环境など今に通じる海の大切さを改めて気づいていただくことも目的として開催した。

- ⑫名 称 : 柳原良平 アンクル船長の夢

主催者 : 公益財団法人 尼崎市総合文化センター(尼崎市総合文化センター)
開催時期 : 平成29年5月20日～7月9日
場所 : 尼崎市総合文化センター
内容 : 1950年代初頭にウイスキーの広告に登場し、現在も幅広く支持を受けるキャラクター「アンクルトリス」のイラストを手掛け、イラストレーター、デザイナー、画家、エッセイストと幅広く活躍した柳原良平の回顧展として開催した。船好きであった柳原が描いた船の絵や収集した資料の紹介をきっかけとして、幅広い層に「海と船と港」の魅力を伝えるとともに、かつて漁場として栄えた尼崎の海を知ってもらうため、尼崎市所蔵の海に関する資料や尼崎周辺の海を浄化する取り組みなどを紹介し、臨海都市・尼崎の魅力を伝え、理解を深めていただく機会とした。

⑬名称 : 企画展「ザ・モンスター～海と陸のへんてこ生物たち～」
主催者 : 徳島県立博物館
開催時期 : 平成29年7月22日～9月10日
場所 : 徳島県立博物館
内容 : 地球上から知られる約160万種の生物には、人間の想像をはるかに超えた造形や色彩をもち、不思議なくらしをするものが存在する。それらの姿や形、くらしには、生きていくために大事な意味があって、気の遠くなるような長い年月をかけて獲得した結果である。企画展では深海生物や海の寄生生物など、とりわけ奇抜な造形が目を惹く生物を取り上げ、それらを育んだ海の魅力や面白さについて共感するとともに、人間と海の関わりについても考えていただく機会とした。加えて、海だけでなく、陸の生物も比較展示することで、海と陸それぞれにすむ生物の多様性を際立たせるとともに、海と陸は互いにつながりがあることも学ぶ。また、磯・河口の生き物やプランクトンを観察するイベント、展示資料をスケッチするイベントなどを通して、身近な自然環境のひとつである海への興味関心を高める機会とした。

⑭名称 : 文化交流展特別展示「水の中からよみがえる歴史ー水中考古学最前線ー」
主催者 : 九州国立博物館
開催時期 : 平成29年7月15日～9月10日
場所 : 九州国立博物館
内容 : 海事文化の研究において、水中遺跡から得られる情報は貴重な資料である。当事業は、水中遺跡の理解、調査研究、保護体制の整備を一層促進するため、水中考古学という学問の歴史と現在の当館の取組みの紹介を通じ、海(海運、海事文化)が日本の歴史や文化の発展にとって重要な役割を果たしたことを知ってもらうことを目的に実施し、特に海を越えた交流(交易・文化交流・戦争など)の歴史を学ぶことに焦点を当てた。プロローグを含め4つの章で構成し、文化交流展示室(常設展示)の一部に水中遺跡から出土した遺物やパネルなどを展示した。また、付帯事業としてイベント4本を実施した。本展を通して水中考古学を入口として、海や船が日本の歴史に果たした役割の大きさを理解していただき、水中遺跡さらには海そのものを保護していく取り組みを進

めていくことを呼びかける機会とした。

- ⑮名 称 : 指宿まるごと博物館Ⅹ「西郷隆盛と海洋国家薩摩」
主 催 者 : 指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ
開催時期 : 平成29年10月14日～ 平成30年3月31日
※ただし平成30年4月1日～平成31年3月17日までは自主開催
場 所 : 指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ
内 容 : 指宿まるごと博物館構想推進事業は指宿市内にある自然・文化財・産業・伝統行事・郷土芸能・施設・イベント等を「貴重な展示品」と捉え、市全体が大きな博物館と位置づけており、「貴重な展示品」をまちづくりや人づくりに活かしていく考え方やその実践である。当企画展は、海洋教育推進の視座で「指宿まるごと博物館」を実践し、市内外の人々に指宿の素晴らしさを理解し、多くの人々に広めて頂く機会とした。先人たちが「海とふれあい」、「海と人とがつながる」ことで「海と人とが共生」していった。その積み重ねにより、現在の指宿の歴史・民俗・文化を築き上げてきた。当企画展では、幕末から明治維新にかけての「海と人との共生の歴史」を紐解きながら「海」について学び、考え、理解し、自発的・積極的に活動できる人づくりとまちづくりの機会とした。

- ⑯名 称 : 沖縄県立博物館・美術館10周年特別展「海の沖縄」
主 催 者 : 沖縄県立博物館・美術館
開催時期 : 平成29年11月1日～ 平成30年1月14日
場 所 : 沖縄県立博物館・美術館
内 容 : 沖縄と海との関係は自然、歴史、文化と他分野においてにおいて切っても切り離せない関係であると言える。よって海と沖縄との関係を総合的に見ていくことで海と地域との関係がいかに重要であるかを多くの人に発信するために開催した。自然史、民俗学、考古学、人類学、歴史学、美術工芸から海にまつわる資料を6つのテーマに分けて展示を行い、今回は特に展示内容についてより理解を深めるために、触れることのできる体験キットを自然史、考古学、歴史学の分野で新たに製作、展示したことやジオラマ模型を製作、展示したこと、映像展示では大型のスクリーンと展示物を関連付けると言った演出を行った。また、付帯事業としてシンポジウムⅠ「海を越えて繋がる世界と琉球」、シンポジウムⅡ「未来につながる海」、出前講座を計5回、『海底資源を採取せよ！水中カメラロボット操縦体験』、ふれあい体験室ワークショップ「海へのあこがれ」、「第10回移動展in北大東島」を実施した。出前講座では離島の中でもとくに島の人口が少ない伊平屋村、北大東村、座間味村で、特別展の内容に関係した講座を行い、特別展の趣旨と海への学びを離島とくにの過疎が進んでいる地域において提供することができた。

2. プログラム2「海の博物館活動サポート」への支援(申請:16団体16事業、支援実施:12団体12事業)

- ①名 称 : 春のぽかぽか美術館
 主 催 者 : 公益財団法人長崎ミュージアム振興財団(長崎県美術館)
 実施時期 : 平成29年4月22日～5月7日
 場 所 : 長崎県美術館
 内 容 : 海の学びの端緒として、未就学児の間に、海に対する楽しい思い出が残るような体験の機会を多く提供することにより、海への親しみを高めていただき、今後海に関わる次世代の育成を目指した。具体的には、海の中の美しい環境を、プロの絵本作家が絵で再現した壁面作品などを造作の一環として体感的に鑑賞し、海の生き物たちが楽しそうに過ごしている姿をみることや、活動の中で海の生き物を作ることで、美しい海の環境にあこがれる気持ちを育てる場を創出することを目指した。それにより美しい海の環境の大切さを感じ取って、将来海洋環境の保護に対する意識を高めることができると考えた。そのため、館内の造作としては、海の中の美しい環境を、絵で再現した壁面作品などを造作の一環として体感的に鑑賞し、海の生き物たちが楽しそうに過ごしている姿をみることで、美しい海の環境にあこがれる気持ちを育て、または来館者が海に関連した作品づくりやプロの作家による造作物との触れ合いを通して、海の生き物や船といったものへの愛着を育み、海洋に対する興味関心を育てることを目標とした。
- ②名 称 : シーラカンスから海を学ぶ
 主 催 者 : 北九州市立自然史・歴史博物館
 実施時期 : 平成29年6月1日～平成30年3月31日
 場 所 : 北九州市立自然史・歴史博物館
 内 容 : 国際シーラカンスシンポジウムを開催し、最先端の研究成果や未発表の研究を共有し、シーラカンスと海の研究について学ぶ機会を得た。これに関連する普及イベントで「大西洋とインド洋の起源と変遷」、「シーラカンスの進化と生態」といったシーラカンスを入口として、海の基本と最先端の研究成果を学ぶ講演会、展示解説、ワークショップを開催した。これに先駆け申請館の常設展示場内に「シーラカンスと海のおいたち」の展示を作製し、本事業の事前学習兼事前告知スペースとして公開した。国際シンポジウムでは当館を第一部とし、第二部をふくしま海洋科学館、第三部を神奈川県立生命の星・地球博物館で開催し、各館の所蔵資料の特色を活かしたテーマでの開催とし、シーラカンスを入口としてインド洋の起源や形成過程、大西洋の成り立ちなどについて知る機会とした。
- ③名 称 : 移動水族館
 主 催 者 : 青森県営浅虫水族館
 実施時期 : 平成29年8月1日～11月30日
 場 所 : 青森県立聾学校、田子町立上郷小学校、介護老人保健施設 青森ナーシングライフ、他
 内 容 : 当館独自でこれまで行ってきたアウトリーチ活動の内容を「海の学び」の視点を取り入れる事により充実した学習プログラムに発展させると共に、従来実施対

象としていた水族館への来館が容易ではない県内の特別支援学級を始め、これまで1カ所だけであった高齢者の方々を対象とした施設のみならず、新たに一般学級や施設へと広げたアウトリーチ活動として水族館の展示生物などを出前することにより水族館ならではの観点から「海に親しみ」、「海を知る」場を提供した。水族館を出前することにより「海の生き物」と触れ合う場を創出し、次世代を担う子供達が「海に親しみ」、「海を知る」機会とした。高齢者の方々が幼い頃に慣れ親しんだ「海への思い出」を覚醒させ、「命の尊さ」、「海を守る」ことの大切さを再認識することにより、「海」を次世代へ残そうとする意識喚起を促す機会とした。

- ④名 称 : 「海洋教育」体感型アウトリーチ教材(トランクキット)運用と新規開発
主 催 者 : 群馬県立自然史博物館
実施時期 : 平成29年6月1日～平成30年1月21日
場 所 : 群馬県立高崎高等特別支援学校、富岡市立丹生小学校(特別支援学級)、群馬県立盲学校、他
内 容 : 海のない群馬県内の学校教育機関と連携・協働しながら、実物を体験、体感する自然史系博物館の視点で、海洋教育に役立つコンテンツと運営方法の構築を目的とした。平成28年度に制作したトランクキット・磯を探索しようプロトタイプは、磯の生き物と磯の生き物たちが暮らす海洋環境と生態系について学ぶことができる効果的なトランクキットとなった。平成29年度は、「磯を探索しようプロトタイプ」の運用とプログラム開発を行うとともに、体験型アウトリーチ補助教材「トランクキット・浜／干潟を探索しよう」を新規に開発し、プロトタイプとして制作した。
- ⑤名 称 : 豊かな海、素敵な海にするために私たちにできること
主 催 者 : 貝塚市立自然遊学館
実施時期 : 平成29年5月27日～平成30年2月28日
場 所 : 大阪湾沿岸(貝塚市、阪南市、泉南市、泉南郡、)、貝塚市(近木川)、和歌山県(和歌山市、西牟婁郡)
内 容 : 豊かな海・素敵な海にするために、海や川の生きものを調べ、どんな生きものが、どこに、どんなふうに住んでいるのかを知り、生きものが棲める条件を考える機会とした。釣りや、地引網、稚魚放流などの体験活動や海の様子を現地で体感することで海の生きものを身近に感ずる機会とした。大阪府立農林環境総合研究所水産技術センターで研究者の方から棲みやすい海にするための工夫や大阪湾の問題を聞いたり、漁港を尋ね漁業の現状を聞、身近な大阪湾を守るために私たちに何ができるかを考える機会とした。
- ⑥名 称 : 輝津館「海洋教育」事業
主 催 者 : 南さつま市(南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)
実施時期 : 平成29年7月5日～平成30年1月31日
場 所 : 坊津海岸、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、阿多貝塚、他
内 容 : 南薩摩の海に棲む魚をテーマに、海岸環境の現地見学や輝津館でのワークシ

ト等を用いた学習を通し、その種類や形態的特徴、生態、魚たちを育む海の環境の大切さなどについて学ぶことを目的に実施した。「海のお仕事」をテーマに、講師の船員OBから、航海の仕事や暮らし、世界の海にまつわる体験談を聞き、船舶業務や船上生活、世界の海洋地理、海路・海運の重要性等について学ぶことを目的として実施した。また、歴史交流館金峰と連携し、「貝塚」をテーマに阿多貝塚の現地見学をはじめ、縄文時代の海産物調理の再現実験の見学や貝塚出土遺物の見学、火おこし体験などを通し、地域における海産物の利用の歴史や海岸線の変化の歴史、海にまつわる地域の文化財等について学ぶことを目的として実施した。

- ⑦名 称 :「海の学び」をふかめるまちづくり
主 催 者 :真鶴町(真鶴町立遠藤貝類博物館)
実施時期 :平成29年7月26日～平成30年3月31日
場 所 :真鶴町立遠藤貝類博物館、真鶴魚市場、真鶴港、他
内 容 :「海の学び」を深める種々のイベントを通じて、町内外の人々に海を身近に感じてもらい、「真鶴＝海の学びの場」としてイメージ付けることを目的とした。多角的な視点から「海の学び」を体験する機会を提供し、真鶴に来訪するきっかけを作るとともに、地域資源としての海の活用方法を試案した。展示観察会やSNSを通じて地域の自然の魅力を発信し、日常生活で自然に触れる機会のない方々にもその機会を提供した。役場職員や町民対象の研修を開催し、海を活かしたまちづくりの町政からのアプローチにつなげた。町の事業者と海を活かした協働イベントを開催し、海の魅力を広めるとともに、地域活性化につなげることを目指した。

- ⑧名 称 :「海を考えるカルチャー週間」
主 催 者 :「海を考えるカルチャー週間」実行委員会(笠沙恵比寿 博物館)
実施時期 :平成29年10月14日～11月5日
場 所 :笠沙恵比寿内博物館ホール及び敷地内デッキ、野間池近海
内 容 :本事業は、「海」と親しみ、ふれあい、大切に思う心を育む為に、実施した。様々な年齢層の方に興味を持っていただけるように、多角的な視野から地元の海を学べるプログラムを実施した。例えば、公開講座には、内容を分かりやすいものにする為に、それぞれの分野のファシリテーターにも登壇頂き、実際の経験も重ね合わせて講演頂き、広い年齢層の方々に、「海」について理解を深める場を設けた。味わい事業では、実際の笠沙の海の豊饒を味わい、特に、笠沙沖では、豊富な種類の魚介類が獲れる事を理解して頂き、「地元の海」への理解も深めてもらいました。体験プログラムでは、ヨット・カヤック・漁船で、海洋上から、実際の海を観察し、人間の五感を以って「海」を理解する機会を得ることができるよう工夫した。生命の起源であり、人間の生活を支え、そして今、「環境汚染」に脅かされる「海」への理解を深める機会となるよう工夫した。結果として、「学びの場としての海」、「自然に触れ合う遊びの場としての海」、「人間の営みにとってかけがえのない海」を理解する機会とした。

- ⑨名 称 :むつ湾シーサイドスクールプロジェクト2017
 主 催 者 :特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)
 実施時期 :平成29年7月31日～平成30年6月17日
 場 所 :青森市・平内町、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸
 内 容 :豊富な水産資源を有するむつ湾にフォーカスした海の臨海学校「むつ湾シーサイドスクール」を戦略的に実施し、青函連絡船「八甲田丸」が、今後地域における海の学び(海洋教育)の情報発信及び活動拠点になることを目指し実施した。本プロジェクトを通じて市民の海への愛着を取り戻し、市民ひとりひとりに豊かな海を次世代に引き継ぐ重要性を意識づけていく機会とした。2020年八甲田丸近隣に人工的な干潟が完成予定であり、その干潟に多様な生態系を生み出すための、海藻草場・磯場の造成や管理、環境美化のためのゴミ拾い、さらにその干潟を利用し街の賑わいをつくるための事業などを担う人材育成の機会となった。
- ⑩名 称 :とっても楽しい大阪の海～遊べる大阪湾を丸ごと学んじゃおう～
 主 催 者 :大阪湾見守りネット
 実施時期 :平成29年8月29日～平成30年6月30日
 場 所 :せんなん里海公園(しおさい楽習館)、岸和田市立公民館、和歌山県立自然博物館、他
 内 容 :本事業は、「大阪湾の学びをテーマとしたポータルサイトの構築」、「大阪湾沿岸域の学びに関する動画の作成」、「作成した動画DVDを大阪府下の小・中学校へ配布」の3つの取り組みを行い、大阪湾沿岸域で実施されている海の学びに関する取り組みを地域の学校に向けて紹介する事業であったが、台風の影響や主催者、連携機関等との調整に時間を要したため、本事業の内容を変更し、大阪湾沿岸域で実施されている海の学びに関する取り組みについて十分に把握した上で、観察会やイベント、授業の実施状況を撮影し、大阪湾沿岸域の博物館等で実施される海の学びに関する動画の作成を中心として実施した。
- ⑪名 称 :東海大学海洋科学博物館における、障害者アートを活用した障がい者サポートプログラム
 主 催 者 :cocore(ココワ)
 実施時期 :平成29年11月26日～平成30年4月14日
 場 所 :東海大学海洋科学博物館
 内 容 :全ての人に「海の学び」を提供するため、障がい(知的障がい・発達障がい・自閉症・ダウン症)をもつ小中学生が博物館に来てもらえるよう、東海大学海洋科学博物館と連携しワークショップを行った。ワークショップではダンスや造形(絵画)をとりいれ、五感を使って楽しく海を学べるよう工夫した。またワークショップでの様子写真と描かれた絵を展示する「アート展」を開催し、より多くの方に博物館に足を運んでいただき、障がいのある子どもたちの豊かな感性で描かれた作品と啓発グッズにより、今までとは違った「海」を感じ、海に関する

専門的な知識を学べる機会とした。さらに、ワークショップの結果をもとに、cocoreと東海大学海洋科学博物館、静岡大学高橋先生、清水手をつなぐ育成会がマニュアルを作成し、障がいのある人への「海の学び」プログラムを実施した。

- ⑫ 名称 : 国際ジュゴンシンポジウムとジュゴンと海を知るワークショップと講演会2018
主催者 : 国際ジュゴンシンポジウム実行委員会(鳥羽水族館)
実施時期 : 平成30年2月22日～3月31日
場所 : 鳥羽国際ホテル、鳥羽水族館
内容 : 1986年にフィリピンにおいて保護されたジュゴンの幼獣「セレナ」が鳥羽水族館へ搬入されてから飼育30年が経過したことを記念し、国内外で活躍するジュゴン研究者たちに集まっていただき、ジュゴンが置かれている現状や保全に向けた取り組み、野外における研究、さらに鳥羽水族館のセレナを対象とした研究結果などを紹介するシンポジウムを開催し、一般に対してもジュゴンを通じた海の環境や現状を知る機会とした。ジュゴンの研究やジュゴンの生態を紹介することにより、海への理解を深め、海の環境保護への意識を高めた。ワークショップによりジュゴンの生きものとしての特徴と生息環境を知ってもらい、ジュゴンを通じて海を知り、海を守る意識を啓発した。シンポジウムの成果を受け、ポスター発表のポスターを展示し、一般にもわかりやすく研究発表内容を通じた海の学びの機会とした。

3. プログラム3「海の学び調査・研究サポート」への支援(申請5団体5事業、支援実施:5団体5事業)

- ① 名称 : 尾張の歴史・文化的地域性と伊勢湾との関わりに関する考古学・民俗学的研究
主催者 : 名古屋市博物館
実施時期 : 平成29年6月1日～平成30年3月31日
内容 : 慶應義塾図書館所蔵の『明治十二年漁具絵図下調 知多郡役所』、三重県総合博物館所蔵の『三重県水産図解』を閲覧し、知多半島および伊勢湾沿岸地域における江戸時代～明治初期にかけての漁法や漁具の実態を調査した。徳川林政史研究所所蔵の『熱田羽城海中漁場案内図』を閲覧して、名古屋周辺における漁場や漁獲物、沿岸地形などを把握した。京都府立丹後郷土資料館では国宝『海部氏系図』の複製および丹後地方の考古資料を見学し、古代伝承と考古学的実態の両面から尾張と海および丹後・若狭地方との関わりを調査した。また、海上安全守護で知られる青峯山正福寺・住吉大社での信仰内容・信仰圏の調査、古代の海上交流の活発さをよく示すおばたけ遺跡(三重県埋蔵文化財センター)・志島古墳群(志摩市教育委員会)・宮山古墳(南伊勢町教育委員会)の出土資料調査および現地踏査、答志島・神島の現地踏査、伊勢湾奥部と地形環境や漁撈が共通する浦安市の漁撈民俗および浦安市郷土博物館の展示の調査など、尾張・知多と深く関わる海洋関係資料の調査をおこなった。さらに、伊勢湾沿岸地域・島嶼部の海上からの景観を調査し、

写真と動画による撮影記録を実施した。

- ②名 称 : ヤドカリから見る大阪湾～大阪湾南東部のヤドカリ類相と大阪湾の環境についての研究～
主 催 者 : 岸和田市(きしわだ自然資料館)
実施時期 : 平成29年8月1日～平成30年3月31日
内 容 : ヤドカリは、大阪湾の沿岸域でよく見られるが、季節性や分布状況等の知見は限られている。本研究は、大阪湾南東部の潮間帯から水深60mまでに生息するヤドカリ類の分布調査に加え、文献や標本情報も収集することで、大阪湾南東部のヤドカリ類相の網羅的な把握を目的とした。現地での調査、記録のとりまとめおよび発表については、岸和田市立光陽中学校科学部と共同で実施した。大阪湾は私たちにとって最も身近な海であるが、同湾の環境や生き物の多様性について学ぶ機会のごく限られているのが現状である。本調査研究により、大阪湾におけるヤドカリ類の生態や分布状況に関する知見を蓄積するとともに、大阪湾の環境を学ぶ教育プログラムの開発を試みた。
- ③名 称 : 開国をテーマとする「海の学び」学習支援プログラムの開発に関する基礎的研究
主 催 者 : 神奈川県立歴史博物館
実施時期 : 平成29年10月6日～平成30年6月30日
内 容 : 本調査研究は、学校における「海の学び」については主に理科分野が中心であったことから、神奈川の歴史ならではの「開国」をテーマに、資料を活用した「海の学び」学習支援プログラムを開発することで、博学連携の強化を図ることとした。また、博物館を知る教員と学芸員を研究分担者とする研究会を組織し、資料調査や他の博物館の事例研究を行い、2年計画のうち2年目の本年度は、主として小学校教員向けプログラムと児童向けプログラムについて検討した。これにより、これまで「海の学び」のみならず、博物館(資料)の活用に関心を向けてこなかった教員が、積極的に博物館ならびに資料を利用する機会を増進することを目標に実施した。
- ④名 称 : 日本海の循環システムを利用した環境変動に対する生物の応答に関する基礎研究および学校向け教育プログラム開発に向けた準備
主 催 者 : 蘭越町(蘭越町貝の館)
実施時期 : 平成29年10月6日～平成30年5月31日
内 容 : 日本海は、半閉鎖海域で、水深300メートル以深に日本海固有水が存在するのが特徴であり、日本海固有水の海水循環は、約100年と言われている。一方、世界の海は約2,000年と言われている。そこで、日本海を大きな実験水槽と見立てて、そこに生息するプランクトンをモデルに、地球環境の変動が、生物にどのような影響を与えるかについて考える上で、指標となる生物の探索・採集を行った。あわせて、得られた情報も含めて新たな学習指導要領から「海の学び」を洗い出し、教育開発プログラムの開発に向けた準備を行った。

- ⑤名 称 :長崎・熊本両県における自然災害(地震・噴火・津波)に関する総合調査—寛政4年「島原大變肥後迷惑」の文献・慰霊碑を中心に—
主 催 者 :熊本大学日本史研究室資料保全継承会議・安高啓明研究室
実施時期 :平成29年11月1日～平成30年5月31日
内 容 :寛政4(1792)年に地震にともない島原にある眉山が山体崩落を起こした。これは、島原湾に流れ込むと、津波が発生し、長崎県島原市と熊本県天草市に多大な被害を及ぼした。これを「島原大變肥後迷惑」といい、今日に至るまで語り継がれている。本事業は、江戸時代の当時の文献史料や石碑など、歴史的・民俗学的観点から、当時の状況を紐解き、将来、醸成しておくべき防災意識や、当時、海の恵みを受けて生活していた人々の思いを明らかにし、「海洋教育」を発信手段として成果を提供していくことを目標に実施した。

4. 「海の学びミュージアムサポート」事業専用ホームページの構築と運用

本事業の趣旨や目的、募集情報やサポート事例を広く博物館や一般に広報することを目的にWEBページの公開・運用を行った。平成29年度の各サポート採択館とプログラム内容の告知や活動報告書の公開により、今後における社会教育からの「海の学び」活動の推進を目的とした博物館が実践する海洋教育の実践事例アーカイブ化を行った。あわせて平成30年度サポート事業の公募を行うことにより、本事業への申請や相談を広く受け付け、全国の博物館等に対して本事業の存在やねらいのPRを行った。

5. 情報・ノウハウのサポート(3件)

既存のプログラム1～3に該当しない新たな枠組みのサポートとして、各博物館での海の学びの実践に必要な、資金を伴わない「情報・ノウハウのサポート」を行った。

(1) 青森県“陸奥湾”をフィールドに活動する博物館との情報交換会の開催

開 催 日 :平成29年5月30日

開催場所 :プラザホテルむつ 小会議室

参 加 者 :①青森県営浅虫水族館

②むつ市海と森ふれあい体験館

③青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸

内 容 :青森県の“陸奥湾”をフィールドに活動する博物館同士の活発な活動を促すことを目的とした情報交換の開催サポートを行った。互いの活動内容や陸奥湾に関する情報交換の場作りをサポートし、今後の連携の可能性を模索するための機会とした。同一地域内における共通テーマでの連携体制構築と活動の活性化を目的としたサポートを実施した。

(2) 日本郵船歴史博物館 2017年夏休みキッズイベント「ポンポン船をつくろう！」へのサポート

開 催 日 :①平成29年6月23日(企画、事前打ち合わせ)

②平成29年7月23日(イベント実施1回目)

③平成29年7月29日(イベント実施2回目)

開催場所 :日本郵船歴史博物館

内 容 :地域ならではのテーマを活用した独自の親子向け海の学びイベントの開発サポー

ト依頼があったことから、地域のシンボル“氷川丸”をモチーフとしたポンポン船工作を通じて、海運や船舶の重要性を楽しみながら学ぶ親子向け海の学びイベントの開発サポートを行った。

- (3)「大浦天主堂 キリシタン博物館」展示予定の「サンフェリペ」模型製作に係る専門家等紹介協力のサポート

内 容:平成30年4月1日に開館した「大浦天主堂キリシタン博物館」での展示を目的とした「サンフェリペ」模型製作に係るサポート依頼があったことから、船舶模型製作や船舶考証ができる専門家紹介や情報提供等のサポートを行った。

6. サポート事業の広報強化

開 催 日:平成29年11月26日

開催場所:テレコムセンタービル

内 容:全国の各博物館が中心となって地域・分野の枠を越えた海洋教育の実践をするためのサポートを行う『船の科学館「海の学びミュージアムサポート」事業』の事業内容や実施成果を、広く一般および博物館関係者を対象に紹介することを目的に、「サイエンスアゴラ 2017」への事業紹介ブースの出展を行った。事業成果物の一例として群馬県立自然史博物館が制作した『「海洋教育」体験型アウトリーチ補助教材(トランクキット)』(平成28年度プログラム2「海の博物館活動サポート」事業成果物)を展示紹介し、開発者である群馬県立自然史博物館スタッフと共に展示解説を行う事で、親子を中心とした幅広い年齢層の方たちに「海」を体験し、親しみを持って頂く機会とした。

7. 釧路の巡回展開催への協力について

開催時期 :平成30年2月17日～3月25日

場 所 :船の科学館 本館1階ロビー

内 容 :平成29年度プログラム1「海の企画展サポート」支援対象館である釧路市立博物館が開催した特別展『常設展示リニューアル記念特別展「冷たい海の大冒険！！～関勝則が写す北の海の生き物～」』において、釧路市立博物館での特別展終了後に巡回展示として各地を巡回する予定であったが、当初予定していなかった多数の博物館施設等から巡回展実施の依頼があったことから巡回先を増やしたい旨の協力依頼があり、関東方面初の巡回先として船の科学館での巡回展開催に対する協力を行った。

8. 平成29年度支援対象館への現地訪問事務手続確認(3件)

支援対象館への現地訪問により、事業成果の確認や今後の海の学びの実施に向けた情報交換を行うと共に、事務手続き関連の書類確認を行った。

- (1)公益財団法人 帆船日本丸記念財団

実 施 日:平成30年2月24日

- (2)東海大学海洋科学博物館

実 施 日:平成30年5月25日

- (3)沖縄県立博物館・美術館

実 施 日:平成30年6月14日

1. 事業目標の達成状況:

【申請時の目標】

<定量的目標>

- 1.事業1で支援予定の2017年度16企画展の目標来場者数382,500名
(2016年度の支援館来場者数(340,978名)比12%増加)
- 2.事業2で支援予定の2017年度博物館活動の目標参加者数の1館平均1,662名
(2015年度1館平均(1,511名)比10%増加)
- 3.本事業を通じて、当団体として継続的な連携が期待できる、自治体と連携した博物館3件の獲得を継続して目指す
(①八甲田丸、②遠藤貝類博物館、③輝津館)
- 4.本事業全体の2017年度問い合わせ館数78件(2015年度(71件)比10%増加)
- 5.本事業の2017年度ホームページアクセス件数47,391ページビュー
(2015年度(43,083)比10%増加)
- 6.本事業を通じ海の学芸員候補10名を育成する

<定性的目標>

- 1.全国の社会教育施設が行う海に関する展示、アウトリーチ活動、教育活動、まちづくりに関して、全国の社会教育施設をリードする存在として船の科学館が認識されること
- 2.各支援先が、地元自治体と共に、本事業による支援後も、引き続き海に関する企画展、アウトリーチ活動、教育活動、まちづくりに取り組める体制を構築する

【目標の達成状況】

<定量的目標の達成状況>

(1)プログラム1「海の企画展サポート」への支援

実施16企画展ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性や専門分野を活かした企画展を通して、各博物館ならではの「海の学び」を広く推進することができた。

「海の企画展サポート」入場者数各館合計:384,220人(目標達成率:100%)

(2)プログラム2「海の博物館活動サポート」への支援

実施12事業ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性や専門分野を活かした参加型の博物館活動の実施を通して、各博物館ならではの「海の学び」を広く推進することができた。

「海の博物館活動サポート」参加者数各館合計:493,524人(1館平均41,127人)(目標達成率:2,474%)

(3)当団体として継続的な連携が期待できる、自治体と連携した博物館獲得の継続

自治体と連携して「継続・自立を目指した事業」や「博物館が核となって地域でムーブメントを起こす事業」、「博物館を中核とした地域内連携構築」などのモデルケースとして、将来的に発展する可能性を持つ事業3件を継続してサポートし、地域社会を巻き込み始めた事業として推進することが出来た。(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸、真鶴町立遠藤貝類博物館、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)(目標達成率:100%)

(4)本事業全体の2017年度問い合わせ件数

プログラム1～3に対して、合計で77件の問合せや申請相談があった。

(目標達成率:98.7%)

<内訳>

- ・プログラム1:36件
- ・プログラム2:31件
- ・プログラム3:10件

(5)博物館情報ネットワークの構築、運用

インターネットを活用し、「海の学びミュージアムサポート」専用WEBサイトにおいて、各サポートプログラム内容の告知や募集を行うと共に、決定したサポート事業の報告書等を広く公開し、今後の社会教育における海の学びの活動を推進することを目的とした海洋教育実践事例アーカイブの基盤を整備した。

■「海の学びミュージアムサポート」WEBサイト

①アクセス者数:5,940人(31,783ページビュー)(目標達成率:67%)

※集計期間:2017年3月1日～2018年7月31日

②アクセス者の平均閲覧ページ数:3.45ページ

<内訳>

- ・新規閲覧者:88.7%
- ・リピーター閲覧者:11.3%

(6)「海の学びコーディネーター(仮)」候補の育成

本サポート事業における目標の一つである「人材育成」については、これまで本サポートを活用頂いた各博物館の事業担当者を対象に、海の学びの必要性・重要性を理解し、積極的な博物館活動への展開が期待できる人材を「海の学びコーディネーター(仮)」候補として位置づけ、今後において協働できる人材の育成を目的に、人材の選定に着手するとともに対象者との今後に向けた情報交換を開始した。(目標達成率:160%)

<定性的目標の達成状況>

1. 当初掲げた「全国の社会教育施設をリードする存在として船の科学館が認識される」という目標に対しては、単年度で見た状況からすれば達成に至っていない。しかし、中・長期的な事業の目標として置き換えられれば、既存プログラムの枠を越えた新たな「情報・ノウハウのサポート」の依頼が2館からあったことから、新たな目標の達成に向けた第一歩としての手応えを感じる事が出来た。

2. 全ての支援先に対して「地元自治体と共に、本事業による支援後も、引き続き海に関する企画展、アウトリーチ活動、教育活動、まちづくりに取り組める体制」の構築を目標とする状況には至っていない。しかし、その中でも自治体と連携して「継続・自立を目指した事業」や「博物館が核となって地域でムーブメントを起こす事業」、「博物館を中核とした地域内連携構築」などを当館との共通の目標として認識し、将来的に発展する可能性を持つ事業3件を継続してサポートし、今後の継続した海の学びの実施体制を確認することが出来た。(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸、真鶴町立遠藤貝類博物館、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)

2. 事業実施によって得られた成果:

(1)博物館が行う多種多様な海の学びの実践事例の創出

プログラム1～3によるサポートを通じて、合計33件の「各地域、各分野ならではの、博物館が行う多種多様な海の学びの実践事例(サンプルケース)」を生み出すことができた。

■プログラム1「海の企画展サポート」への支援

①主催者:釧路市立博物館

入場者数:70,834人

成果:入場者数は目標の708%と上回る事が出来た他、企画展や巡回展を通して、一般に暗く地味なイメージを持たれがちな釧路の海のイメージが変わったと多くの来場者に実感していただき、スーパーハイビジョンを活用した海中風景や海洋生物の映像コンテンツの魅力や訴求力の高さが広く一般に認知されるようになり、北海道内の水族館施設の関係者からも映像の展示などが展示手法として優れているため、展示づくりの参考にしたい。またより広く小・中学校でも郷土の学習教材として導入してはどうかというご提案も市民の方からいただいた。また、企画展の写真や映像がとても好評であったため、当初予定していなかった博物館施設からも巡回展の開催の申し出をいただき、多数の会場で巡回展を開催し、各会場でより多くの方々に観覧していただくことができた。改善点としては、釧路沖の深海や外洋環境にすむ生き物についてはあまり紹介できなかった。今後の企画展で釧路海底谷や千島海溝などの深海の環境や釧路沖を回遊する生物についても紹介していきたい。

②主催者:蘭越町(蘭越町貝の館)

入場者数:3,078人

成果:海の生物について、目には見えない、小さなプランクトンが重要であることについて、興味を持ってもらうことが出来た。プランクトンのほとんどは、複雑な構造をしていて、観察したプランクトンも様々な形態をしていた。このような微小生物を走査型電子顕微鏡で観察する機会は少ないため、子供だけではなく、大人も興味・関心を持っていた。企画展を通じて、低次生産の重要生や、海と大気のかかわりについて理解してもらうことができた。また、地球温暖化や海洋酸性化の機構、緩和策・適応策について考える機会を提供することができた。改善点としては、付帯事業について、回数を重ねるごとにノウハウや資料となる

アーカイブスが蓄積し、事業の前半と後半では、提供できたサイエンスサービスの質に差が感じられた。また、入場者数が目標を下回り達成率61%だった。

③主催者: 苫小牧市(苫小牧市美術博物館)

入場者数: 4, 080人

成果: 展覧会では、株式会社商船三井及び商船三井フェリー株式会社の両本社から全面協力を得ることにより、これまで社外で公開されていない作品を含めた形での展覧会を開催することができた。また、独立行政法人 海技教育機構から協力を得たことにより、柳原良平作品の芸術的な価値のみならず船の知識に関する学びの要素を展覧会に付与することができ、総合博物館ならではの展覧会活動を実現した。柳原良平の作品展は、道内公立館では初めての試みであり、市外からの来館者が目立った。また苫小牧港開発株式会社とは、2事業、苫小牧港管理組合とは2事業の連携イベントを行うなど、地元団体との連携には一定の効果があったものと思われる。

改善点としては、会期後半は口コミやSNSでの情報共有に一定の効果が見込まれたが、会期前半は来館者数が伸び悩み目標入場者数の達成率81%となった。全道版への新聞掲載や、ラジオやTVなどの取材が得られなかったことも要因の一つであると思われる。また、今回はじめて関係構築に至った諸団体との継続的に連携の機会をつくっていくことも今後の課題である。

④主催者: 千葉県立関宿城博物館

入場者数: 13, 020人

成果: 本企画展では、江戸時代の文化を裏で支えるために大いに役立っていた肥料の王様、干鰯について、漁・生産・流通・利用法など、その全貌を紹介した。また、海の資源である「イワシ」の加工や流通をとおして海が私たちにとっていかんかに大切であるかを伝える展示とした。展示期間中に「歴史講座」、イワシの解剖やイワシ・菜種などの油搾りなどの「体験教室」を実施し、単にイワシが加工されて肥料となって流通し、農産物などの生産を向上させ、人々の生活に大いに役立っていたことを理解してもらった。併せて海や海の資源に対する興味・関心も高まった。

改善点として、入場者数については昨年度比としては若干増加したものの、結果的には86.8%と目標の数値には至らなかった。開催期間中の二大イベントであった「歴史講座」および「野外講座」が、両日ともに大型台風に見舞われ、当初予約のキャンセルが相次いだ事が大きく響いたものと思われる。

⑤主催者: 公益財団法人帆船日本丸記念財団(横浜みなと博物館)

入場者数: 6, 005人

成果: 横浜の漁業が、江戸時代からの江戸前の食文化の形成に寄与したことや、戦後のウオーターフロント開発の時代を経ながらも今も脈々と続き、環境と水産資源維持の取り組みも行っていることを紹介し、海の重要性、将来について考える機会とした。魚食の専門家やさかなクンを招いての講演会では、東京湾の魚を通じて、地元の海の環境維持の大切さを学ぶ機会となった。また、親子お魚料

理教室で魚を料理し、海苔工場見学会で横浜の漁業の現場を直接見学することで、海の恵みに感謝し、海の環境、海の大切さを考えてもらう機会とした。今日の横浜港が、高度成長期のウオーターフロント開発によって、横浜の漁業や海の環境をある程度犠牲にして成り立っていること紹介し、海の環境と開発のバランスの難しさを問題提起した。

改善点としては、入場者数が目標の46%と大きく下回った。関連事業の募集は順調であったが、残念ながら企画展の入館者数には結び付かなかった。入館者数は目標の半分以下にとどまったが、熱心に見入る来館者ばかりだった。それだけに会期前半の時点で人数の推移を見極め、追加の広報をするべきであった。

⑥主催者:石川県立歴史博物館

入場者数:23,969人

成果:入場者数は目標の240%と上回る事が出来た。幕府や藩の主年貢が米であり、その主要産地でもあった県域が、北前船の拠点だったことを通して、海が物流の大動脈となり経済活動を活性化して社会の発展を推し進め、人々の暮らしと深くかかわっていたことを紹介した。資料展示のほか、講演会や展示室での列品解説、関連地へのバスツアー、連携機関によるイベント開催、土日祝日限定で砂絵・ストラップ作りなど、多方向から海と生活との歴史に興味を持たせる機会となった。

改善点としては、輸送手段から出発した「北前船」が地域経済の発展に大きくかかわっていたことや、地域同士を結んでいた航路や港湾の整備と管理、燈明台や船磁石・遠眼鏡などの安全管理など学んだが、「身近な海」を知ることへのアピール力が弱かった。船宿や湊の果たした役割の紹介を充実させ、輸送に向けた産物の保護や出荷手段の工夫(俵物、四十物など)、そのための関連業(俵の製造、塩作りなど)の活性化などを紹介し、海と陸の両面から「北前船」を描き、新しい視点での海との関係性に気付かせることで、地域の海を学ぶことがより明確にできたと考えられる。

⑦主催者:東海大学海洋科学博物館

入場者数:67,245人

成果:今までにない数の博物館、研究機関、企業、団体から協力を得ることが可能となり、充実した特別展を実施することができた。来館者や参加者に対して多分野の切り口から魚類や釣りに関する魅力を伝える機会となった。また、フィールドでの活動や体験から、海を利用した活動の楽しさを十分に伝えることが可能となり、参加者の海に関する行動や考え方に、良い変化を与えるという目的を達成した。魚類や釣りに関して第一線で活躍する著名人と交流する場を設け、海洋教育、キャリア教育としての成果を得た。幼少時代に仲間たちと海に関して楽しく安全に、充実した学びの経験をすることが、いかに重要であるかを本特別展とその付帯事業の実施により来館者、参加者に認識させることに成功した。今後も海や海洋生物への理解を深める活動を継続して、積極的に実施していかっかけとなった。

改善点としては、入場者数が目標の89%と下回ったほか、実施したハンズオン展示は効果的であったが、さらに多くの同様な展示を行うことができれば来館者の理解度や印象がより良くなったと思われる。また、本企画展では外部企業・組織からの展示物の協力が大変多く、今後も各機関との博物館活動における協力体制を維持していくことが課題である。

⑧主催者：公益財団法人東海水産科学協会（鳥羽市立海の博物館）

入場者数：14, 435人

成果：入場者数は目標の99%となり、ほぼ達成する事が出来た。骨まで食べる、出汁として利用するなど、魚を無駄なく上手に利用する日本の魚食文化の奥深さや、肥料・薬・サプリメント・装飾品・水質改良材・お守りなど、私たちは日常生活のなかでも多様な面で海の生きものの恩恵を受けていることを、実物資料や模型から認識してもらう機会となった。これにより、日本人と海の生きものとの密接で長年に渡る関係性を学ぶことにつながった。また、海からもたらされる恵みに感謝し、限りある貴重な資源として無駄なく利用することの重要性を理解する機会となった。漂着して死んだ生きものの骨格や、海洋汚染が原因のひとつと考えられる骨格異常の魚の画像等を展示し、上記のような骨格の利用と並ぶことにより、海的环境悪化と観覧者自身の生活とを結び付けて認識し、環境保護への意識をより高める機会となった。展示資料や解説、関連事業を通じて、特殊な場でなくても、日常的に海の学びの実践が可能であることを意識的に伝えることで、自発的・能動的な学習を促した。魚骨まで使った調理、骨格標本づくり、タイのタイ集め、魚骨アート制作などに子どもたちが自主的に取り組むことや、海の生きものを研究し、海洋環境の保護にも取り組む人材の育成につながる事が期待できる企画となった。

改善点としては、借用資料により骨格を展示したが、自館で標本を作成することが殆どできなかった。また作業時間等の関係上、関連事業として骨格標本づくりができなかったことは、本展の主旨を鑑みると不十分であったと思われる。

⑨主催者：三重県総合博物館

入場者数：17, 312人

成果：展示やそれに伴う調査活動などを通じて、地元である志摩市内の人達が、自分たちが暮らす地域の海の豊かさについて改めて気付くきっかけとなることができた。また、子どもたちが志摩地方で食べる魚類の調査に自主的に取り組み、地元の食材についてより深く学ぶことができたほか、それによって多くの魚を得ることができる海の豊かさを実感することができた。さらに、世界で初めてとなるイセエビの成長過程の樹脂標本やイセエビの模型を展示することで、来館した子どもたちがイセエビに興味や関心を抱ききっかけができた。なお、子ども用のワークシートを年齢に応じて二種類製作し、子どもたちの発達段階に応じた気付きや学びの活動を、遊び感覚で楽しく行うことができた。付帯事業では和具海老網同盟会の漁師さんによるトークショーを通じて、資源としてのイセエビを保護しながら獲っていく過程を実感することができたほか、ギャラリートークでは、個々の資料についてより理解を深めるとともに、資料の持つ海の学びの背景などを

深める事ができた。

改善点としては、入場者が目標の66%と下回ると共に、表題のつけ方をはじめとする情報発信力不足から、二つの展示が異なるものと来館者に理解されてしまい、事業の関連性を上手く伝えることができなかったことから、今後はしっかりした事業計画や広報計画を立てる必要があると思われる。

⑩主催者：公益財団法人大阪市博物館協会（大阪市立自然史博物館）

入場者数：20, 297人

成果：瀬戸内海沿岸の博物館・水族館等と連携し、2012年度から市民参加の観察会や調査会などを行い、自然の情報や標本資料を蓄積してきた成果をもとに、瀬戸内海の地形的な成り立ちを紹介するとともに、瀬戸内海の特徴的な自然環境（砂浜、海岸林、干潟、アマモ場、磯、ガラモ場など）と、そこで見られる地質・動物・植物など、瀬戸内海の地学的・生物学的な魅力、生物多様性からもたらされる魚介類を中心とした自然の恵みを学ぶ機会とした。これにより、自然の豊かさや高い生産力を知り、未来に伝えていくことの重要性を考える、という海の学びの機会とした。観察会、オープンセミナー、講演会、ギャラリートーク、ワークショップ等の関連事業を行い、幅広い年齢層の参加者に対して海洋生物に親しんでもらうとともに、それらを取り巻く海の自然のしくみや成り立ち、自然海岸の減少、富栄養化と貧栄養化、外来生物、内湾の貧酸素、外来生物の増加等、高度経済成長期以降に瀬戸内海で起きた問題をトピックとして取り上げ、その解決の方策や、実際の取り組みについて紹介し、海を知り・守る重要性を知る機会となった。

改善点としては、入場者が目標の72%と下回ったことから、SNSを用いた情報発信を積極的に行ったり、地下鉄中吊り広告の回数を増やすなど、広報については従来よりも努力を進めたつもりであったが、ネット広告の重点化等、時流を見すえた広報戦略の展開が必要であったと思われる。

⑪主催者：大阪府立弥生文化博物館

入場者数：7, 260人

成果：北海道から琉球列島まで、旧石器時代から古代まで、漁撈にくわえて製塩や海上交通までにかかわる資料を、重要文化財も含め600点以上展示し、考古学の観点から海民の歴史を扱う展示会としては地域、時代、分野、展示数とも近年まれにみる充実したものとなった。きしわだ自然資料館など他館との連携は当館の専門外もカバーしていただくことによって、出土資料から歴史を考えるという狙いを越えて、海の自然環境に関する深い知識を提供でき、体験に基づいて海洋環境保護の大切さを再認識していただくことができた。来館者の感想をみるとほとんどの方から高い評価をいただいた。海民の歴史、海の重要性について改めて知っていただけたとともに、海への興味、環境保護の気持ちをさらに喚起することができた。

改善点としては、入場者が目標の45%と下回ったが、秋季は2回の大型台風の接近をはじめ、大雨、長雨に見舞われ、特に来館者が期待できた週末にあたってしまったため、もう少し余裕をみた計画にすることが必要であったと思われる。

る。

⑫主催者:公益財団法人 尼崎市総合文化センター(尼崎市総合文化センター)

入場者数:4,306人

成果:柳原良平の作品は、これまで関西ではまとめて紹介されることが少なかったため、入場者からは代表作「アंकulturリス」で知られるイラストレーターとしての柳原とは別に、本展で初めて船の画家として活躍していたことを知ったという声が多かった。柳原の創作活動を総合的に紹介でき、かつ海の学びについて関心を持ってもらうという本展の目標は達成できた。尼崎の海を学ぶコーナーを設けるにあたり、市内の各関係機関から協力を得て、尼崎市所蔵の漁具や古文書など歴史資料の展示、現在の臨海地域の活動を紹介する写真のパネル等を展示し、尼崎の歴史と海の学びの両方を充実させることができた。また、市内の団体との繋がりができ、今後の活動にも有効なネットワークを築くことができた。改善点としては、入場者が目標の56%と下回った。事業全体の進行が遅れたことから当初検討していた新聞社等の共催を得ることができず、新聞購読者の招待客を確保できなかった。そのため、当初予定より招待客が大幅に減少する結果となり、総数では目標を達成することができなかった。今後は入場者の確保のため、企画の段階から各方面の広報活動も出来る限り早く行うよう努めたい。

⑬主催者:徳島県立博物館

入場者数:25,986人

成果:生物の姿形、暮らしには、生きるための大事な意味があることを学ぶ機会とした。深海生物や海の寄生生物といった奇抜な造形が目立つ生物に焦点をあてて生物の形の面白さに興味を喚起するとともに、それらを育んだ海の魅力や面白さについて共感する機会とした。人間と海の関わりについても考えるきっかけとなった。磯や河口の生き物を観察するイベント、プランクトンを観察するイベント、展示資料をスケッチするイベントを実施し、身近な自然環境の一つである海への興味関心を高める機会となった。陸の生物と比較して展示することで、それぞれに暮らす生物の多様性を際立たせるとともに、海と陸は互いにつながりがあることを学ぶきっかけとなった。改善点としては、入場者が目標の38%と大きく下回った。海と陸の生き物を同時に多数扱ったことは、上述の通り効果的であった反面、展示会場の狭さも相まって、それぞれ深く掘り下げて取り上げることができなかった。一方で、本企画展では深海生物、寄生生物、干潟の珍奇生物、貝類、昆虫など、さまざまなコンテンツを盛り込んだため、どのテーマが好評だったかが来場者の様子ならびにアンケートから明確になり、今後のテーマ選定の参考となった。

⑭主催者:九州国立博物館

入場者数:85,000人

成果:入場者数は目標の112%となり、目標を達成する事が出来た。日本の周辺海域に存在する水中遺跡(沈没船など)から発掘された遺物などの展示を通して、

海(海運、海事文化)が日本の歴史や文化の発展にとって重要な役割を果たしたことを知ってもらう機会となった。特に、海を越えた交流(交易・文化交流・戦争など)の歴史を学ぶことに焦点を当てた。付帯事業として、水中カメラマンによるトークショー、子供向けの海のサイエンスショー、水中考古学の研究者による講演会、水中遺跡のVR体験などを実施し、海をフィールドとした仕事の紹介、水中遺跡の調査の手法や遺跡の意義など展示遺物からだけでは示せないことに的を絞り、深く知る機会とした。日本では馴染みのない海の遺跡について理解を深めてもらい、水中遺跡の保護や海そのものの保護の取り組みを進める機運を高める機会となった。

改善点としては、来館者アンケートによると「海そのもの」についての理解がまちまちであった。展示方法が水中遺跡の紹介に主眼を置いたため、海についての学びは来館者にとって明確に伝わらなかった部分があるため、船や海事文化を前面に押し出し、展示テーマを明確に示す必要があった。

⑮主催者:指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ

入場者数:11,567人

成果:入場者数は目標の376%となり、目標を大きく達成する事が出来た。第1章から第4章の展示を見学することで、【海に親しみ】・【海を知り】・【海を利用する】ことを学び、自発的・積極的に【海を守る】必要性を芽生えさせる機会を提供することができた。一方的な展示ではなく、見学者が展示パネルや海を越えて運ばれた実物を実見することで、見学者と「海」を対峙させ、海洋教育を推進していく機会づくりができた。展示パネルや特別企画展図録に「海洋教育」のキーワードや理念を提示し、【海と人との共生】について自発的に考えさせる機会を提供することができた。また、指宿市役所観光課が中心となる「いぶすき西郷どん館実行委員会」が指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ1階講堂に「ドラマ館」を設置し、平成30年1月12日以降は連携しながら開館した。大河ドラマ「西郷どん館」の放映もあり、予想以上の相乗効果があった。

改善点としては、今回企画展や付帯事業にあたり、市内の小・中学校に協力を依頼し、社会開花の授業で児童・生徒の参加があったが、今後の継続した学校単位での連携した取り組みとして企画展を活用し続けてもらえるよう改善の必要があると思われる。

⑯主催者:沖縄県立博物館・美術館

入場者数:9,826人

成果:入場者数は目標の98%であったが、例年当館での特別展に係る入場者数は6,000~7,000人で推移していることを考えると、今回の特別展『海の沖縄』は例年以上の来館者であったことになる。このことは沖縄と海とがイメージとして沖縄県立博物館・美術館の10周年記念展と銘打ったことで博物館関係者も多く観覧したことも入場者数増の要因として挙げられる。次に離島地域の自治体から出前講座ならびに移動展を実施するにあたって多大な協力を得られたことも大きな成果であると言える。今回、出前講座ならびに移動展を実施した離島地域は漁業やマリンレジャーといった海に関連する産業が盛んな地域であったこ

とから、海をテーマとした展示内容は身近な内容として捉えていただいたことが多大な協力を得られた要因であると思われる。また、今回作成し展示した体験キットやジオラマ模型については低年齢層に人気を博していた。これらから、体験キットやジオラマ模型展示内容に興味をもってもらう意味ではかなり効果があったように思われた。最後に「海を大切にしたい」「海についてもっと知りたくなった」「海から多くのことを学べた」といった趣旨の反応が観覧者から聞かれたため、特別展『海の沖縄』の趣旨を大きく外れない形で理解してもらったものと捉えている。

改善点としては、海に対する理解を人文学、自然科学分野という多方面にわたって総合的な展示を試みたが、テーマが多様であるが故に観覧者の興味を絞ることができなかったと思われる。各分野相互の連携を取ってテーマを絞ることが出来れば、さらに興味深い展示になったものと思われる。

■プログラム2「海の博物館活動サポート」への支援

①主催者：公益財団法人長崎ミュージアム振興財団（長崎県美術館）

参加者数：3,770人

成果：同時進行で多岐にわたるイベントを実施したが、「海」という統一のテーマ性を持たせていたため、参加者にとって親しみやすい内容となった。具体的には、「魚」や「船」といった具体的な対象を基に作品制作やスタンプラリーを行ったり、館内装飾を海の中の風景を彷彿とさせるイメージのもので統一したりしたため、美術館という一般的には硬い印象を持たれている施設でも、印象がかなり柔らかいものとして受け入れられた。特に「おさかなブローチをつくろう」や「ミニミニワークショップコーナー」では、主な対象として狙った未就学児の親子連れが常に満員状態で来場し、作品完成後、出来た作品に対してとても誇らしげに身につけたり周囲に見せびらかせたりするなど、海の生物をつくることによって「自己肯定感」が形成された様子がよくわかった。プレイベントとして実施した「ジンさんとお魚を描こう」でも同じような様子が窺え、自由に「魚を描く」行為に、下は未就学児から上は高齢者の方まで楽しそうに参加され、海への親しみの機会となった。改善点としては、参加者が目標の84%と下回った。昨年までと比べ、全く同期間に美術館近隣にて開催されたイベントのため、駐車場が常に満車状態であり、同時に近隣道路にて渋滞が起こっていたため、本イベントへの来場者数が伸び悩んだことから、近隣との調整の必要性が感じられた。

②主催者：北九州市立自然史・歴史博物館

参加者数：449,621人

成果：参加者数は目標の128%となり、目標を達成する事が出来た。シーラカンスを題材に海のおいたちを学ぶ展示では、前年度の入館者数に基づいて目標参加者数を設定したが、本事業のぽけっとミュージアムの展示替えや冬に行った特別展アクアキングダムでの展示なども入館者数増の一因と考えられる。シーラカンスを切り口とした海に関する学びの全ての事業を予定通り行うことができたことから、現在の海がどのようにして今の形となったのか学んだり、シーラカンス

を通してゴミによる海の汚染を知り、海を大切にすることを学んだり、海洋のゴミの問題について考える機会も与えることができた。

改善点としては、北九州での講演会とアクアマリンふくしまでのシンポジウム参加者が少なかった。特にアクアマリンふくしまでのシンポジウムは少なかったが、これは開催日が8月13日(日)であり、多くの入館者が予想されたことから、告知をしたものの募集という形を取らなかったためと考えられる。

今後はシンポジウムは応募による参加を呼びかけるのが良いと思われる。

③主催者:青森県営浅虫水族館

参加者数:170人

成果:参加者数は目標の113%と上回る事が出来た他、海の生物の大きさや生息環境など体感できる様々なアウトリーチ教材によって海にすむ生物たちの生態を分かりやすく、障がいのある方や高齢者の方々を含めた参加者たちに伝えることができ、「誰も」が「海に親しみ」、「海を知る」手助けとなった。また、既存のアウトリーチ教材を「海の学び」の視点により実施可能な内容へと発展させる事が出来たため、これまでよりも海への親しみや海を知る点において有効なアウトリーチ教材を開発することが出来た。今後も海の学びの視点を取り入れたアウトリーチ実施が出来る第一歩となった。

改善点としては、高齢者を対象とした施設において魚の実物大のレプリカを触りながらその味わいなどを回想する参加者が多かったため、今後はアジやサバなどの食卓によく上る魚や地元青森でよく食べられるマダラやアブラツノザメなどの実物大や鮮魚店の店頭に並ぶ大きさの切り身のレプリカを充実させれば高齢者の海に関する思い出を呼び覚ます手助けとなるとと思われる。

④主催者:群馬県立自然史博物館

参加者数:3,851人

成果:参加者数は目標の128%と上回る事が出来た他、平成28年度に関係団体と協働で開発した「磯を探索しよう」プロトタイプトランクキットを当初運用を予定していた群馬県立盲学校のみならず、特別支援学級、特別支援学校、サイエンスアゴラ、科学ヘジャンプイン東京など多様な主体を対象として展開し、「海を学ぶ」場を創出できた。また、運用プログラムの中に、開発・制作中の「浜／干潟」コンテンツを試験的に導入することで海洋環境を幅広くとらえることが可能な教材として提供することが可能となるとともに、問題点の洗い出し等を行うことができた。当初予定していた県立盲学校のみでの運用の他に、サイエンスアゴラ、科学ヘジャンプイン東京へ参加、展開することで、より幅広い年齢層にトランクキットおよびプログラムを体験していただくことができた。

改善点としては、磯の生き物に実物標本を当館で凍結乾燥化し樹脂を浸透させたものを使用していることから、磯の生態系を感じることで出来る磯ブロックに実物標本を埋め込む、あるいは、単体で使用しているが、実物標本は実物の触感を体感し、においまで体感できる利点がある一方、もろく破損する。とくに不特定多数を対象としたサイエンスアゴラでの運用では、標本の破損が目立ち、今後さらに展開していくためには、専門家の技術を導入した標本の制作が必要と思

われる。

⑤主催者:貝塚市立自然遊学館

参加者数:649人

成 果:浜での生きもの観察会や釣り体験など野外での実践を取り入れたことや、普段個人では行けない水産技術センターや漁港などを見学先に取り入れたことで参加者は興味と関心を持ち参加した。また、普段聞くことのできない施設の情報やそれぞれの研究者や飼育者などからの講習などは参加者に満足感を与えた。参加者へのアンケートを見ると、設問の「行事は満足ですか?」の答えは、満足が90%、ふつう9%、不満足1%(これは釣りで獲物がつれなかったことや時間が短かったことによる)となった。また、「今後同じような行事に参加しますか?」の問いに対しては、参加する92%、わからない8%、参加しない0%となったことから、行事参加者の満足感が良く分かる結果となった。

改善点としては、参加者数が目標の93%と下回ると共に、今回の行事の参加者を小学校低学年児童と保護者という組み合わせを想定して行ったことから、見学先や施設を子どもたちが興味・関心の持てる場所を中心に設定し、学習の入口としては成功だと思うが、今後、環境教育を進めていく上ではもう少し専門性や学習の難易度を上げていくことが必要ではないかと考えられる。

⑥主催者:南さつま市(南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)

参加者数:117人

成 果:参加者数は目標の167%と上回ることが出来た他、海水魚の専門家や船員OBらの外部講師を招聘し、また市内の文化財・考古関係施設と連携するなど、生物学、社会学・地理学、考古学の各分野から地域の海の魚類や海岸環境、船舶業務や世界の海洋地理、地域における海産物利用の歴史などについて博物館プログラムとして学ぶ機会を学校に向けて提供できた。また、事業の連携・協力先、学校との協働により、野外学習、実際の魚類や博物館展示品の見学、講師へのインタビュー、縄文時代の海産物調理の再現実験の見学・火おこし体験など、参加者の記憶に残る体験型の授業を実施できた。その結果、地域の海でみられる魚類の特徴・生態、これらの魚類が棲む地域の海岸環境の特徴やその大切さを学び、また地元出身の船員OBの体験談から航海を行う人々の仕事や暮らし、世界の海の様子や海運・海路の重要性を学び、さらに地域の史跡「阿多貝塚」を通して、海産物利用の歴史、海岸線の変化の歴史、海にまつわる地域の文化財について学ぶなど、多様な切り口から地域資源を活用した地域ならではの「海の学び」を実施することが出来た。さらに、今回の事業では、坊津地域での活動に加え、新たに金峰地域での活動も実施し、市内対地域への博物館を起点とした海の学びの普及・拡散を目指す取り組みの第一歩となった。

改善点としては、「海の学び」を目的とした授業テーマを設定したが、アンケート結果の中では、「海の学び」という主催側の意図、主旨がしっかりと伝わってなかったと思われるケースも若干みられたため、授業方法の工夫の必要を感じた。

⑦主催者:真鶴町(真鶴町立遠藤貝類博物館)

参加者数:2,217人

成果:参加者数は目標の246%と大きく上回る事ができ、多くの人に「海の学び」を提供することができた。一般の方々を対象にしたイベントでは、自然史的な視点で「海の学び」を深めるとともに、食文化や産業といった、より生活に身近なテーマを取り上げた。参加者アンケートでは好評をいただき、海を活かしたモデル事業として取組んだ美術館との共同イベントで特に顕著で、自然史面と芸術面の両面から海に接することで、博物館、美術館ともに新たな利用者層を開拓することができた。今年度初めて実施した出前授業では、磯の観察会の事前事後学習を実施することで、野外の生物観察体験のみにとどまらず、その背景にある生態系や環境を意識させることができ、学習要素を深めることができた。海を活かしたまちづくりの面では、昨年までに引き続き、町役場と協力して役場職員の研修機会を設け、職員に町の海の魅力を実感してもらった。今年度は海をまちづくりに活かす具体的な案を議論いただき、寄せられた案の比較まで議論を深めることができた。今年度は2件のモデル事業を実施したが、どちらも参加人数は想定を上回り、来年度以降に発展が見込める内容となった。本年度の事業の実施にあたって、真鶴町役場をはじめ、町内の事業者と地域住民に多数の協力をいただき、連携を強めることができた。海を活かした活動を町に定着させることに寄与できたと思われる。

改善点としては、今年度は自然史以外の視点をテーマにしたイベントを開催したが、運営側にとっても挑戦的な部分が多く、内容の事前周知が難しかったため、その改善は今後の課題としたい。

⑧主催者:「海を考えるカルチャー週間」実行委員会(笠沙恵比寿 博物館)

参加者数:238人

成果:広く鹿児島市内など、南さつま市外からも、県内の色々な場所から、小学生から70代の方々まで、幅広い層の方々にご参加頂き、興味を持って、聴講・体験頂けた。日常生活の視点では、広く、綺麗で穏やかに見える「海」も、地球規模では、海面の高さが異なっていたり、凍るような冷たい海があったり、時に、浮かぶヨットがひっくり返るような天候の海があったり、よく見ると、いわゆる海洋ゴミによる汚染がひどかったりと、「海」の現状を参加者が詳しく知る機会となった。講師の話にファシリテーターからテーマに纏わる体験談を加える事によって聴講者にもわかりやすい内容になり、実際の「海洋」の厳しさ・「海」のもつ資源の貴重さなどを理解して頂く事が出来た。笠沙沖で獲れた「たかえび」や、「烏賊」、「鯛」の種類の魚など、豊富にある「地元の海」の魚介類の多さを体感して頂き、予め用意した「笠沙の海の魚たちハンドブック」による解説や質疑応答により興味を持って頂き、新鮮な魚介類の美味しさを体感して頂けた。結果として、「笠沙」の海の素晴らしさ・「海」の大切さ・素晴らしさを身を持って体感頂く事ができた。

改善点としては、参加者数が目標の93%と下回ったことから、プログラムのターゲットがしぼりきれいでなかったことが原因と思われる。子供なのか、一般的なのか、あるいはコアな「海」好きな人たちなのか、企画段階でより深く練って、解

りやすいイベントの内容にするなど、改善の余地があったのではないかと思われる。

⑨主催者:特定非営利活動法人あおりみなとクラブ(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)

参加者数:14,230人

成果:本プロジェクトも3年目を迎え、参加した皆さんは海に興味を持ち、海好きが増えたと実感できた。また、昨年と比べ参加応募者数が増加したことに加え、参加者数の達成率も目標の177%と大幅に上回った。浅虫水族館と連携して事業実施したことにより、参加者の海域環境への理解度をより深めることが出来たとともに、むつ湾沿岸関連施設との意見交換会により、青森市の社会教育活動の一環として平成30年度から本事業と連携していくことになったことも大きな成果となった。今後もむつ湾をフィールドに、もっと海を学びたい、学ばせたいと思っていただける活動内容にし、青函連絡船「八甲田丸」が、今後地域における海の学び(海洋教育)の情報発信及び活動拠点になっていくことを参加者に認識頂く機会となった。

改善点としては、参加応募者数の増加により本活動に参加できない子供達が増加したことは、次回活動の大きな改善点となり、募集定員や活動回数等を含め検討する必要がある。

⑩主催者:大阪湾見守りネット

参加者数:約1,800人

成果:本事業は、独自のHPを持つことができない公立館が多数加盟する団体として、大阪湾をフィールドにした地元の“海”についての学習プログラムの様子を広く公開し、主に学校の教員向けに博物館等社会教育施設を活用した授業の検討を行っていただく機会を設ける事業であった。当初の予定では年内に画像を取りまとめ、年度内にHPの開設・公開、DVDの発送まで行う予定であったが、度重なる台風の直撃等天候不順による撮影イベントの中止・延期等により、予定通りに進めることができなかった。事業内容の変更により、ポータルサイトでの動画配信は行っていないが、動画を編集してYouTubeで視聴できるようにして、地域住民が地域の海での学びを知る機会をつくるとともに、大阪湾を意識し考える人々を増やすきっかけづくりの機会となった。

改善点としては、度重なる予想外の事態により当初計画の殆どを達成できなかったため、今回注力した各活動動画を活かすとともに、今後より多くの活動について動画撮影を引き続き行うとともに、撮影した動画を編集してDVDを作成し、このDVDを小・中学校に配布することで、海に関する活動が少なかった学校などと大阪湾沿岸域で活動する組織・団体との連携を図るきっかけ作りを行う必要がある。

⑪主催者:cocore(ココワ)

参加者数:16,623人

成果:参加者数の達成率は目標の111%と上回った。ワークショップでは、海の生き

物の解説と動きを真似たダンスワークショップと造形(絵画)活動を行い、障がいもつ子どもたちが、海の生き物のことを楽しく学ぶ機会となった。また、東海大学海洋科学博物館と連携することで、障害のある子どもたちが来館しやすい環境を作り出すとともに、スタッフにも障がいのある方への支援方法を体験してもらうことができた。「アート展」では、障がいのある子どもたちの固定観念にとらわれない豊かな感性で描かれた海の作品を見ることを通して、来館者の中には思いもつけない視点に感動して下さった方も多くみられた。さらに、海に関係する博物館における障がいのある方々に向けた幅広い取り組みの実践を目指して、障がいのある子どもたちやその家族に対する理解を深め、新たな利用促進を促すことを目標に、博物館を利用する障がい者のための配慮・対応マニュアル(プロタイプ)を作成した。本マニュアルは、ワークショップ及びアート展でのアンケートの結果をもとに、cocoreと東海大学海洋科学博物館、静岡大学高橋先生、清水手をつなぐ育成会に監修・協力いただき、「博物館で障がいを持つ子供たちが海を学ぶマニュアル(知的障がい・発達障がい・自閉症・ダウン症)～ワークショップ開催事例を元に～」としてcocoreのHPで一般公開した。

改善点としては、アート展を観覧され、アンケートに答えていただいた方に記念品を配布する予定だったが、来館された方すべてがアンケートに答えたにも関わらず記念品を受け取らなかったため、今後はより多くの方のお手元に届くよう博物館と連携し配布方法を改善していく必要を感じた。

⑫主催者:国際ジュゴンシンポジウム実行委員会(鳥羽水族館)

参加者数:238人

成果:参加者数は目標の99%とほぼ達成が出来た他、世界各地でのジュゴン研究からジュゴンに関する最新の生物学的情報を集約、共有し、唯一の草食性の純粋な海棲哺乳類であるジュゴンへの知識を深め、一般の方への海の生きものと海そのものへの親しみを深める機会となった。また、ワークシートを活用してジュゴンが生き続けるためには海の環境がどうあればよいか考えてもらい、海洋環境の保護の必要性を感じてもらった。講演会では、海洋生物保護、海洋環境保全の実際の活動内容がわかり、海の生きものと海の環境を守る具体的な方法、手法を理解でき、実際に行動を起こすための道筋を示唆することができた。

改善点としては、ジュゴンを飼育している水族館は日本では鳥羽水族館のみであり、そのため他の水族館関係者の興味を引き起こすことができなかったことが考えられた。ジュゴンの近縁種であるマナティーを飼育している水族館などへの直接案内をすることで参加者を増やすことができたと思われる。

■プログラム3「海の学び調査・研究サポート」への支援

①主催者:名古屋市博物館

成果:陸地での生活の常識とは異なる海からの視線や、普段の生活習慣・見慣れた何気ない風景などの目に見えない部分に潜在的にある、当地方の歴史文化と海との深い関わりが明らかになった。この成果を展示や普及活動に活用することで、身近な尾張・知多地方の海・海浜地域に現在も息づく海の歴史・文化的特

色に興味・関心を抱き、それらの海の文化を保存・継承する大切さを学ぶことができる。今回の事業では当地方の海の文化を幅広く全般的に調査したが、今後は本調査研究成果により、個別のテーマごとに調査研究を深く掘り下げ、当地方の海の文化に関してより詳細かつ本質に迫る研究を行っていくための礎となった。

②主催者：岸和田市(きしわだ自然資料館)

成果：調査の結果、大阪湾からは計 20 種のヤドカリ類および 7 種のカニダマシ類が確認され、そのうち少なくとも 7 種が同湾初記録であった。一般に大阪湾は、内湾的要素の強い海とされているが、今回の調査により外洋性のヤドカリ類が湾口部で多数確認されたことから、同湾は外洋的な要素も合わせもつ多様な環境特性を有していることが明らかとなった。本調査により、大阪湾産ヤドカリ類相の網羅的な把握が可能になったことに加え、同湾がもつ環境特性の一端を解明することができたと言える。今後、泉南郡岬町にある和泉鳥取高校のフィールドワーク部との共同調査も予定しており、この取り組みは広く泉州地域の中学校・高等学校の科学クラブ、博物館が連携して活動できる基盤構築につながるものである。さらに、今後野外観察会等の普及事業で活用できる資料として「大阪湾ヤドカリ図鑑」の作成を行った。当初は見分け方を説明した資料のみの作成を予定していたが、生徒たちにより深く大阪湾の環境や海洋生物学の基礎的な知識を身につけてもらうことを目的として成果物の内容の変更を行った。本成果物は、今後普及事業等で活用の予定であり、地域住民や子どもたちにヤドカリを入り口として大阪湾の環境や生物多様性に興味・関心をもってもらい、海を身近なものと感じてもらうことが期待できる。

③主催者：神奈川県立歴史博物館

成果：教員および他館で博学連携にかかわる学芸員とともに研究会を組織し、調査研究テーマについて多角的に議論することにより、多様な学習支援プログラムをそろえることができた。また、他の博物館の博学連携状況を実見する機会を持つことができた。あわせて、当館所蔵資料に加え、他機関所蔵資料を調査研究することで、学習支援プログラムの幅を広げることができた。なお、神奈川県のみならず、他地域へも適用可能なオプションをプログラムへ取り入れることができた。

④主催者：蘭越町(蘭越町貝の館)

成果：日本海中部(富山湾)、日本海北部(積丹半島・礼文利尻沖)にて、新種のクリオネと、餌である新種のみじんウキマイマイの採集に成功した。遺伝子解析の結果、ユニバーサルプライマーを用いたmtDNA COI領域の解析では、オホーツク海のダルマハダカメガイと、ほぼ同一と判断された。このプライマーでは両端の全領域をシーケンス出来なく、両端に特異的な領域の可能性が見込まれるので、新たな専用プライマーを開発、思考錯誤し、出来るだけ全領域のシーケンスを行えるように設計した。しかしながら、特異的な差異は存在せず、同様な結果であった。日本海とオホーツクの個体は、足葉や歯舌、生態学的に区別可

能である。よって、生殖隔離に関するnDNAやマイクロサテライトの追加検証が必要となった。現時点における普遍性として、日本海固有水中に、海洋酸性化の指標種の存在が認められた。また、ミジンウキマイマイの一種の貝殻の溶解がステージ1の状態にあることを確認した。新学習指導要領に対応した指導者向けプログラム開発について、その可能性を見出した。

⑤主催者：熊本大学日本史研究室資料保全継承会議・安高啓明研究室

成果：申請時目標に掲げた、「島原大変肥後迷惑」の正確な資料調査を通じて現代の防災意識につながるストーリーの基盤作りを行なうということは、各博物館が所蔵している資料の確認、その解説を進めている。これまで知られていなかった島原藩の行政施策や他国への情報伝達など詳らかにすることができた。また、次世代の学芸員養成と連動するかたちで、調査に参加した院生・学生に資料の取り扱いや解説文の書き方、展示手法などを教示し、実践教育の機会となった。一般にわかりやすく、かつ、次世代の学芸員養成を兼ねて、成果発表展を実施することができたことは大きな成果となった。また、報告シートを一般向けにわかりやすく作成した。これにも、学芸員への就業を目指す院生・学生を参加させ、専門的内容をいかにわかりやすく発信していくかという観点をもたせ、作業させていった。人材育成・教育普及両面の点で、実践的な教育プログラムとして実施することができ、幅広い教育成果を挙げることができた。

(2)プログラム3の成果を基にした「海の学び」の実践

前年の平成28年度プログラム3「海の学び調査・研究サポート」の成果を基に、本年度博物館活動として実際にプログラム1「海の企画展サポート」として実践された事例が1件生まれた。(蘭越町貝の館)

(3)本事業の目標として設定した「自立を目指した事業」及び「博物館が核となって地域でムーブメントを起こす事業」の2つについて、その目標達成に向かって将来モデルケースとなり得る事業として、特に3件に注力したサポートを継続して行った。(真鶴町立遠藤貝類博物館、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)

(4)『来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)』の実施

各サポート対象事業における「海の学び」成果の把握や、今後において全国の博物館等が実施する「海洋教育の推進」活動をより効果的にサポートするための体制構築に向けた事業内容検討用の基礎資料を得ることを目的として、プログラム1・プログラム2において各博物館等が開催したサポート対象事業への来場者・参加者を対象とした、「来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)」を実施した。

第三者評価の視点から、客観的な「海の学び」の効果測定を行うことを目的に実施し、今後の各サポート対象事業における「海の学び」の成果と傾向を把握するための基礎資料として位置づけることが出来た。

【「海の学びミュージアムサポート」事業として】

・設問「海について学びましたか？」P1・P2合算の集計では、「とてもそう思う」と「そう思う」

の合計が88.9%を占め、社会教育現場(博物館等)から「海洋」に関する生涯学習の場を広げる当事業の目的として一定の成果が認められた。

- ①プログラム1「海の企画展サポート」サンプル数:5,046(16事業)
- ②プログラム2「海の博物館活動サポート」サンプル数:1,863(12事業)
- 合計:6,909(28事業)

(5)実施者に対する「海の学び」調査(アンケート)の実施

各プログラムのサポート館が本サポート事業を通じてどの程度「海の学び」の必要性や理解が得られたのかの情報収集を目的として、各プログラムの実施者・実施館を対象としたアンケート調査を実施した。

【「海の学び」の理解度・必要性について】

・設問「海の学びを理解できたか」の集計では、「大いに理解できた」と「ある程度理解できた」の合計が97%となった。また、設問「海の学びの必要を感じられたか」の集計では、「大いに感じられた」と「ある程度感じられた」の合計が94%となり、海洋教育に特化した本事業のサポートを受けることにより、社会教育現場(博物館等)において海洋教育の理解や必要性が感じられたとの回答が得られた。

- ①プログラム1「海の企画展サポート」サンプル数:16(16事業)
- ②プログラム2「海の博物館活動サポート」サンプル数:12(12事業)
- ③プログラム3「海の学び調査・研究サポート」サンプル数:5(5事業)
- 合計:33(33事業)

(6)情報・ノウハウのサポート(3件)

①青森県「陸奥湾」をフィールドに活動する博物館との情報交換会の開催

成 果:地域の海をテーマに3館が初めて顔をあわせる機会を創出した。今回の情報交換会の開催をきっかけに、「陸奥湾」をフィールドに活動する各博物館同士の協力・連携の有効性と、今後における「情報交換会」の必要性を相互確認した。また、当面は今回参加頂いた3館による情報交換等の活動を継続し、将来的には「陸奥湾での海洋教育」をキーワードに県内全域のミュージアムを対象とした連携活動への展開を目標に掲げた。

②日本郵船歴史博物館 2017年夏休みキッズイベント「ポンポン船をつくろう!」へのサポート

成 果:今までに実践経験のない切り口として、地域のシンボル“氷川丸”をモチーフとしたポンポン船の工作をテーマにした、海運や船舶の重要性を楽しみながら学べる親子向けプログラムの企画、開発を協働して実践した。

③「大浦天主堂 キリシタン博物館」展示予定の「サンフェリペ」模型製作に係る専門家等紹介協力のサポート

成 果:新たに開館した「大浦天主堂キリシタン博物館」での展示充実を目的として、「サンフェリペ」模型製作や船舶考証ができる専門家紹介、情報提供等を行い、今後の展示充実に向けたサポートを行うことが出来た。

(7) サポート事業の広報強化

「サイエンスアゴラ2017」(主催:独立行政法人科学技術振興機構)への出展

参加者数:約500名

成 果:事業成果物の一例として群馬県立自然史博物館が制作した『「海洋教育」体験型アウトリーチ補助教材(トランクキット)』(平成28年度プログラム2「海の博物館活動サポート」事業成果物)を展示紹介し、開発者である群馬県立自然史博物館スタッフと共に展示解説を行う事で、親子を中心とした幅広い年齢層の方たちに「海」を体験し、親しみを持って頂く機会とした。あわせて本サポート事業の紹介も行う事で、船の科学館を中心とした社会教育における海洋教育推進体制の構築を目的とした本事業のPRを一般向けに行う初めての機会となった。

(8) 釧路の巡回展開催への協力について

参加者数 :7,493名

成 果 :サポート対象企画展における関東地方への巡回先として、船の科学館での開催協力を行った。協力に際しては、新たに釧路観光コンベンション協会、阿寒観光協会等との連携を提案することで、単なる地方博物館の成果発表にとどまらず、地域観光との連携を初めて実践した。あわせて本サポート事業の紹介も行う事で、全国博物館と協力した海洋教育の実践を当館がサポートしている旨のPRの機会となった。

(9) 平成29年度支援対象館への現地訪問事務手続確認(3件)

成 果 :平成29年度支援対象館を訪問し、海の学びの実践に係る情報交換の機会となった。また、今後の継続・発展した事業実践に向けて必要と思われる事項等についての情報交換の機会となった。

3. 成功したこととその要因

【成功したこと】

- ①プログラム1～3の各種サポートプログラムを活用して、様々な地域・分野から海の学びの実践をサポートすることが出来、各地の博物館を中心として地域社会に対しての波及効果を与える事が出来た。
- ②昨年度から着手した「継続・自立を目指した事業」及び「博物館が核となって地域でムーブメントを起こす事業」など、当館既存プログラムの枠を超えて「海の学びの意識啓発や人材育成」、「博物館を中核とした地域内連携構築」などのモデルケースとして、将来的に発展する可能性を持つ事業3件を継続してサポートし、地域社会を巻き込んだ事業として推進することが出来た。(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸真鶴町立遠藤貝類博物館、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)
- ③情報・ノウハウのサポート(3件)
今年度から新たに行った活動であり、本サポート事務局の主催により行った「青森県“陸奥湾”をフィールドに活動する博物館との情報交換会の開催」の結果、陸奥湾という地域共通のテーマを通じた各館同士の連携体制構築のサポートをすることが出来た。また、『日本郵船歴史博物館 2017年夏休みキッズイベント「ポンポン船をつくろう!」』及び『「大浦天主堂 キリシタン博物館」展示予定の「サンフェリペ」模型製作に係る専門家等紹介協力』についても、今

年度初めて既存の当館プログラムの枠を越えたサポート依頼があったことから、本サポート事業の必要性が認知され始めているという手応えを感じる機会となった。

④「海の学びコーディネーター(仮)」候補の育成

本年度から初めて着手した人材育成事業であるが、これまで本サポート事業を活用頂いた担当者のうち、16名を「海の学びコーディネーター(仮)」候補者として選定し、今後の人材育成に向けた条件等に関する情報交換に着手する事が出来た。

⑤サポート事業の広報強化

本サポート事業の内容や成果のPRについて、これまでは特に博物館関係者向けのPRを行っていたが、新たに一般市民向けのPRを行うため、「サイエンスアゴラ2017」への事業紹介ブース出展を行い、博物館関係者はもとより特に一般に対する事業PRを行った。本年度支援対象事業の成果物の紹介を通じて一般向けに海の学びの成果や当館を中心とした実施体制をPRする事ができ、広く一般に向けた初の事業紹介の機会となった。

【成功の要因】

①各館からの助成申請本申請の前に必ず「事前相談期間」を設け、先方担当者と海の学びの実施に関する綿密な情報交換やサポートを行っている事から、事業の実施体制や実施内容における広がりや深まりが生まれたものと思われる。

②該当する3館の事業については本サポート事務局において「重要拠点」として位置づけ、通常の支援対象館よりもより密接な情報交換を定期的に行い状況確認をすると共に、現地訪問による今後の方向性の確認を行っている点が奏功しているものと思われる。

③情報・ノウハウのサポートの成功要因

本サポート事務局の主催により行った「青森県“陸奥湾”をフィールドに活動する博物館との情報交換会の開催」においては、これまで同地域の単館への支援に止まっていたが、個別に情報交換を行っていたところ、同地域他施設との連携のニーズを共通して得ることが出来たため、同じテーマで活動する3つの施設の連携に向けたサポートをすることが出来た。

また、「日本郵船歴史博物館 2017年夏休みキッズイベント「ポンポン船をつくろう！」及び『大浦天主堂 キリシタン博物館』展示予定の「サンフェリペ」模型製作に係る専門家等紹介協力』についても、本サポート事業支援の有無に限らず、相互の情報交換をし易い関係作りを継続してきたことから、本サポート事業の既存の枠を越えた依頼を頂く事に繋がった。

④「海の学びコーディネーター(仮)」候補の育成の成功要因

これまでサポートを行ってきた各館担当者との継続した情報交換により、各担当者の海の学びの理解度や行動力等について知る事ができ、今後の人材育成に向けた候補者の選定や人材育成方法に関する情報収集を行うことが出来た。

⑤サポート事業の広報強化の成功要因

本サポート事業内容の一般に向けたPRとして、単なる本サポート事業内容の紹介にとどまらず、具体的な海の学びの成果物として、今年度支援対象館である群馬県立自然史博物館と協働して、具体的な海の学びの成果物を体験的を通じて紹介することが出来たことから、一般に向けた有効な事業PR機会の創出が出来たものと思われる。

4. 失敗したこととその要因

【失敗したこと】

- ①本サポート事業の定性的目標として「全国の社会教育施設をリードする存在として船の科学館が認識されること」を掲げているが、本目標を達成するためには単年度での一朝一夕な取り組みでは無く長期的な計画に基づいた取り組みとして実施する必要があった。

【失敗の要因】

- ①本サポート事業の最終的な目標として掲げる「全国の社会教育施設をリードする存在として船の科学館が認識されること」を達成するためには、最終目標に至るまでの途中の状態を中間目標として定め、その中間目標に向けた事業展開を行っていく必要があったのではないかとと思われる。具体的には、これまで以上の広報PR強化に加えて、本サポート事業のブランド化に向けた取り組みを新たに行う必要があったと思われる。